

DESIRE The Doll 台本

ト ラ ッ ク 1 意思を持つ人形達

SE 寮に戻つてくるヒロイン

SE カバンの中からアロマ達を取り出すヒロイン

SE 小さな爆発音（ロレッタ／人の姿に）

ロレッタ1 「っくあー！ やつと夜になりましたわね！  
全く、この時間帯になるまで動けないなんて、  
我ながらじれつたい仕様ですわ！」

SE 小さな爆発音（アロマ／人の姿に）

アロマ1

「そう？」

「ゆつくり過ごせるし、僕はいいと思うんだけどなあ」

ロレッタ2

「ええー？ 私は絶対に嫌ですわ！  
せっかく自由に動ける時間帯なのに、  
じつとしているだなんて勿体ないですもの！  
ね、マスターだつてそう思うでしょ…つて、  
んもう、またそんな驚いた顔をなさつてる。  
もう日が沈んでいるんですから、この姿になつて当然でしょう？  
貴女が私達を拾つて1週間と少し、  
そろそろ慣れて頂きたいですわ」

ヒロイン  
ご、ごめんね、つい…。

アロマ2

「ふふ、そんな畏まつて謝らないで。

ロレッタも本氣で怒つてゐる訳じやないし、

それに、意志を持つ人形なんて僕達くらいなもんどうしき。

ほら、せつかく学院から戻つて来たんだから、ゆつくりしよう?」

SE 移動して、椅子に座るヒロイン

アロマ3

「そういうえばマスター、今日も先生に褒められていたね。

魔力の使い方が日に日に上手になつてゐるつて。

ふふ、僕達を使う事にだいぶ慣れてきたつて事なのかな。  
ちゃんと役に立ててゐるみたいで良かつたよ」

ヒロイン いつもありがとうございます、二人とも

ロレッタ3

「うふふ、礼には及びませんわよ。

だつて、こうして人形の姿をしてゐるけれど、

僕達は人の基礎魔力を補う補助道具。

つまり、貴女がたの力になれなくては、存在する価値が無いのですわ。

…とはいえ、僕達は創造主様が作つた自作の産物。

市販の補助道具なんかよりもよっぽど強力！

マスターを落ちこぼれだなんて二度と言わせませんわ！」

ヒロイン はあ…。

アロマ4

「あ、あれ?

どうして落ち込んじやうの、マスター。

あ…もしかして、ずるい事してゐなあつて思つてゐんじやない?

…ふふ、やつぱり。

僕達と契約を結んだ時も、そうやつて渋つていていたもんね。  
そういう所、素敵だなあつて思うよ。

でも、これつてさ、貴女が手に入れた幸運だと思うんだ。  
だつて、僕達がこうしてここにいるのは、

貴女が拾つてくれたお陰なんだしね」

ロレッタ4

「そうですね。

喋つたり大きくなつたりする不思議な人形なのに、  
こうしてお傍に置いて下さる。

そんなお優しい貴女だから、力になりたいと思っているんですよ?  
不正なんて思われては、ちょっと寂しいですわ」

ヒロイン

…ありがとう。

アロマ5

「ふふ、やつと笑つてくれた!  
ねえ、貴女は真面目な人だから、  
きつと色々考えちゃうのかもしれないけれど、  
僕達を手に入れた事で、低かった貴女の魔力も補えているんだし、  
今は立派な魔術師になる事だけを考えようよ。  
貴女が所属したいと思っている部署の採用試験も、  
あと半年に迫つて…あ」

SE

お腹の音

ロレッタ5

「もう、アロマつてば。  
そんな下品な音を出して…はしたないですわよ?」

アロマ6

「う、ごめん…。

結構お腹空いちやつてたから…」

ロレッタ6

「それは私だつて一緒ですわよ!  
でも、マスターがまだ何も食べてないのに  
私達ががつつくのはみつもないんじやありませんこと?」

ヒロイン

いいよ。

ロレッタ7

「えつ、いいんですね?  
でも、帰宅したばかりですし、疲れているのではなくつて?」

ヒロイン

褒められたお礼だから

アロマ7

「お礼、か。

そんな風に言ってくれるなんて、道具冥利に尽きるね、ロレッタ」

ロレッタ8

「ふふ、本当に。

それではお言葉に甘えまして、私達が先に頂戴しますわね」

ヒロイン  
でも、優しくしてね

アロマ8

「ふふ…もちろんだよ。

身体を張って僕達にご飯をくれるんだもん。

優しく頂くのは当たり前。

：それじゃ、マスター、今日も美味しく頂くね？」

ア9／ロ9

「大事な大事な、貴女の身体を。

…ふふふ」

## トラック2 淫靡な食事

SE ベッドに座る軋み音

アロマ10

「んちゅ、ん、んちゅ、んん、あむ、んん、んちゅ、ん…。  
もつと、舌絡めてマスター…ん、んちゅ、  
あむ、んん、れろ、じゅる、んん、んちゅ、れろ、じゅる、  
んつ、んちゅじゅるる、んんつ、ふふ、キス、気持ちいいね、マスター。  
んんつ、れろ、じゅるる、じゅるる、んんつ… (以下キス/10秒)」

ロレッタ11

「んもうつ、アロマばかりずるいですわよ！  
いい加減私にもマスターを味わわせて下さいましっ」

アロマ11

「んはあ！  
ふふ、ごめんね、ついがつついちゃつた。  
…どうぞ、ロレッタ」

ロレッタ12

「ふふ…！  
さあマスター、次はロレッタといっぱいキスして下さいまし。  
ん…んちゅ、ん、あむ、んちゅ、ん… (以下キス/6秒)  
んちゅ、んはあ…。  
うふふ、ねえマスター？」

さつき、貴女は今日のお礼だつて仰つてくれましたけど、  
それつてね、私達も同じなんですのよ。  
いつも私達を使つてくれて嬉しいなつて思つていますの。  
だから、その気持ちをたくさん受け取つて下さいまし。  
ほら…もう一度、んちゅ、んん… (以下キス/10秒)」

アロマ12

「ふふ、気持ちよさそうだね、マスター。  
でも、僕の事も意識して欲しいな。  
ほら、こうして後ろからマスターに触れてあげるね」

SE

布擦れ

アロマ13

「ふふ、僕ね、貴女の胸って大好きなんだ。  
ふわふわで触り心地が良くて、  
こうしてずっと触っていたくなるんだよ。

ん…ん…あつ。

ふふ、貴女の乳首、もう硬くなっちゃってるね。  
ほら、こうして指で擦つても、全然柔らかくならないし。  
ふふふ！」

ヒロイン

んうつ！

ロレッタ13

「ん、んちゅ、んはあ！  
…うふふ、吐息が荒くなっていますわよ、マスター。  
アロマに乳首をこりこりされて、熱くなつてきちゃいました？  
ふふ、恥ずかしがらなくともいいじやありませんの。  
そうなつて欲しいから触れているんですし。  
ね？ もつともっと熱くなりましょう？  
ほら、膝立ちになつて。

下の服、脱がせて差し上げますわ」

S E

服を脱ぐS E

ロレッタ14

「あら？ どうして足を閉じちゃいますの？  
まだ下着が残っていますのに…」

アロマ14

「ふふ、やつぱり下は恥ずかしい？  
それじや、その気持ちをもつと解（ほど）かせてあげないとね。  
ほら、こっち向いて、マスター…。  
もう一度、僕とちゅーしよう？  
ん、んちゅ、んつ…（以下キス／10秒）」

ロレッタ15

「ふふ、だんだんと足の力が抜けてきましたわね。  
これなら、下着も脱がせてあげられそう。  
よいしょっと」

S E

下着を脱がせる

ロレッタ16

「あら、まあ。

うふふ、マスターのこーこ、もうすっかり潤っていますわよ。

んん：ああ、この魅惑的な香り。

すぐにでも啜りたくなっちゃいますわね…！

でも、御馳走は我慢してこそ美味。

まずはもっと良くして差し上げませんと。

指、入れますわね、マスター」

SE

水音

アロマ15

「ん、ちゅ、んん…ん、んちゅ…あつ。  
…離れちゃった。

ふふ、ロレッタの指が入ってきたのを感じちゃったせい？  
今日はちょっと敏感だね、マスター。

でも、嬉しいな。

だって、感じれば感じるほど、貴女の身体は美味しくなるんだもん。  
だから、そのまま素直にロレッタの指を感じていてね：  
ん、ちゅ、んん…れろ、うむ、んちゅ…（キス演技／10秒）」

ロレッタ17

「ふふ、アロマのキスだけでも濡れてきていますわね。  
でも…私の指でも感じて頂かないと。

んっ…動かしますわよ、マスター。

…ん、んん、んっ…」

SE

手マン水音

アロマ16

「んちゅ、ん…ふふ、キスの味、甘くなつてきました。  
でも、もつとだよ、マスター。  
もつともつと、甘いキスを頂戴。  
あむ、んんっ、んちゅ（キス演技／10秒）」

ロレッタ18

「ああ、どんどんくちゅくちゅしてきましたわ！  
とつてもいい感じ！

ふふ、このままどんどん高まって、  
一度真っ白になりましようね、マスター。

ほら！」

SE 手マン激しく

SE ヒロインイキ表現

アロマ17 「ん、んんっ、じゅる、じゅるる、んっ、んはあ！」

あ、はあ…はあ…あはは！

さつき、とびきり甘くなつたよ！」

…ふふ、いつちやつたんだね、マスター」

SE くちゅ音（指を抜く音）

ロレッタ19 「ああ…見て下さいまし。

私の指に、マスターのぬるぬるがこんなに絡みついて…。

うふふふ！

いつたばかりのマスターの愛液、なんて美味しいそなのかしら。

あむ、んちゅ、んん：れろ、れろれろ…

ああ…美味しい…んちゅ、れろれろ…（指舐め/10秒）」

SE 顔をそらす

アロマ18 「ふふ、ロレッタつてば、夢中になつちやつて。

でも、仕方がないかな。

だつて、イつたマスターの愛液つて、本当に美味しいんだもん。

だからさ…僕もいーい？ マスター」

ヒロイン …うん

アロマ19 「ふふ、ありがと。…んちゅ。

それじやあロレッタ、場所変わつてくれる？

僕もマスターを味わいたいんだ」

ロレッタ20 「んちゅ、んは…。

ふふ、わかりましたわ、アロマ。

よいしょっと…」

SE ロレッタ近づく

ロレッタ21

「マスター。

貴女の愛液、と一つでも美味しかったですわよ。

そのお礼に、今度はロレッタが貴女を高めてさしあげますわ。

ほら：そのままベッドへ横になつて、上の服をたくし上げて？

ロレッタにマスターのお胸を見せて下さいまし」

SE

ベッドきしむ音

ロレッタ22

「うふふ：アロマも言つていたけれど、本当に綺麗なお胸ですわ。  
ん…こうして、優しく優しく愛撫して…。  
…ん、んん、ん…うふふ。ん…ん、ん…」

アロマ20

「よつと…。

あ、わあ…ふふ！

マスターの大事な所、凄く濡れてるね。

それに、早く触つて欲しいって、ひくひくしてるよ。

ああ：こんなのが見てたら、貴女の中に入れたくなっちゃうな」

アロマ21

「あ…うん、 そうだよ。

僕は男性型だから、舐めるより入れる方がより美味しく摂取できる。  
でも、今日はがつついちゃつたから、啜るだけにしておくんだ。  
：それじゃマスター、貴女の美味しい愛液、沢山頂戴ね。  
ん、れろ」

SE

布擦れ

アロマ22

「ふふ、確かにもう甘いや。  
でも、もつともつと甘いのが飲みたい。  
だから、マスターがどうしても感じちゃう敏感な所も、  
全部一緒に舐めてあげるね。  
ほら：（以下クンニ演技／10秒）」

SE

ヒロイン感じる動作

ロレッタ23

「あは！」

「マスターったら、とつても甘いお声！」

アロマの舌が気持ちいいんですね。

ふふ、私も負けいられませんわ。

マスターの可愛らしい乳首、ちゅぱちゅぱさせて下さいましね？  
あむ、んちゅ、んん：れろ、んちゅ：（以降舐め演技／10秒）」

アロマ23

「ああ、どんどん溢れてきた…んん、れろ、ん、じゅる、じゅる、  
んんっ、甘い…甘いよ、マスター。」

れろ、ん、じゅるる、んつ、もつと、もつと頂戴。  
んつ、んんっ…（以下クンニ演技／10秒）」

ロレッタ24

「んちゅ、んん…ちゅぱ。」

んふふ、なんて可愛く感じていらっしやるの、マスター。

こんなの、またキスしたくなっちゃいますわ。

ね、マスター：んちゅ、んんっ、んんっ…（以下キス／10秒）」

アロマ24

「ん、じゅる、んんじゅるる、んはつ！」

ああ…凄い、また甘くなつた！

れろ、じゅる、じゅる、んう、こんなの、舌止めらんないよ！

ん、んちゅ、んんっ（以下クンニ演技／10秒）」

ロレッタ25

「ん、ちゅ、はあ…。」

うふふ、キスだけでも相当甘く感じますわ…！」

マスター、もう限界近いんですね。

ふふ…アロマ、堪能するのはそこまでにして、

そろそろマスターを最高の気分にして差し上げなさいな」

アロマ25

「ん、じゅる、じゅるる、んつ、はあ！  
ふふ、わかつた。」

それじやあマスター、貴女の 大好き な敏感な所、いっぱい舐めるね。  
たくさん感じて、貴女の至高の味を僕に頂戴！  
んちゅ、れろ、ん、じゅる、（以下激しいクンニ演技／10秒）」

アロマ26

ん  
ん  
んじゆ  
る  
ん  
つ  
ん  
は  
あ  
！

あ、うませ 一〇二

マヌターリ 貴女の腰が大きく跳ねた  
めちゃくちゃ美味しい蜜が溢れたよ！  
ふふ…いけたみたいで安心した。

11

アロマ27

うん、満足したよ。  
：お疲れ様でした、マスター。

ん、  
ちゅ」

S E

ロレッタ26

あら、マスターっては…うふふ！  
でも、お腹が空いて当然ですわよ

食事を撰られる前に、私達の相手をして下さつたのだもの」

アロマ28

「へへ、ごめんね、マスター。  
がつついちやつたお詫びに、今夜は僕達が食事を用意するよ。  
といつても固形物は摂取できないし、  
粉末のスープ物になつちやうけどね」

ヒロイン  
ありがとう

ロレツタ27

マスターはそのまま少しゆつくりしていらして。

うん！  
それじゃ、ちょっと待つてね、マスター！

### トラック3 ぬくもり

SE

部屋でくつろぐヒロイン

ロレッタ28

「ふふ、うふふ、うふふふ！」

ヒロイン

帰ってきてからずっと機嫌がいいね、ロレッタ

ロレッタ29

「うふふ、嬉しくて当然でしょう！」

だって、今日の模擬試合、マスターが上位入賞したんですよ？  
先生だけじゃなく、同級生達からも凄いって称賛されていて…！

ああ…どうして夜の間しかこの姿になれないのかしら！  
いつでもこの姿になれるのなら、

あの瞬間にぎゅっと貴女を抱きしめましたのに！」

アロマ30

「それはダメだよ。  
僕達っていうマスターの秘密がバレちゃう。

そうなつたら、僕達だって困っちゃうでしょ」

ロレッタ30

「わかっていますわよ。

あくまでたとえですわ、た・と・え」

アロマ31

「ふふ、ごめん、一応念を押しただけだよ。

…でも、本当に凄いよね、マスター。  
改めて上位入賞、おめでとうございます」

ヒロイン

二人のおかげよ

ロレッタ31

「もう、またお礼なんて言つて。

何度も言つていますけど、私達は道具なのです。  
所有者様に使われてこそ、存在価値があるのですから、

マスターありがとうなんて言う必要は全くな…あ、あら？」

SE

ロレッタにヒロインが倒れる

ロレッタ32

「…ふふ、どうしたんですの、急にくついてきて…。」

もしかして、模擬試合を無事に終えた事で、気が抜けちゃいまして？」

ヒロイン

なのかな？…ごめんね、ロレッタ。

ロレッタ33

「いいんですのよー、謝らなくて。

でも、試合を頑張ったマスターには、ご褒美をあげませんとね。

…ちゅ！」

ヒロイン

え！

ロレッタ34

「ふふ…どうして驚いていらっしゃるの？」

ご褒美といえば、楽しくてとっても気持ちのいい事、でしよう？」

ヒロイン

…お腹が空いてるんだね？」

ロレッタ35

「うふふ、バレちゃいまして？  
でもね…ただお腹が空いているからってだけじゃないんですよ。  
さつきも言つた通り、頑張ったマスターに労いがしたいんですの。  
これは本心ですわ。

だから…だめ？」

ヒロイン

…わかつたよ。

ロレッタ36

「！…いいんですのね。  
ありがとうございます、マスター！  
それじゃ、早速寝室に行きましょ」

ヒロイン

でも汗を流してから！

ロレッタ37

「え？…ええ…汗を落としてからなんですの？  
うむう、確かに沢山動かれていましたし、  
女性型人形としては、  
貴女の気持ちもわからなくは無いですけれど…うむむう」

アロマ32

「ふふ。

今日のロレッタは随分と我慢が効かないみたいだね。

うーん…あつ。

じゃあさ、皆でバスルームに行こうよ。

マスターも汗を流せるし、僕達も美味しい食事がとれる。

一石二鳥じゃない?

…ということで、僕達がいっぱいご奉仕してあげるからね、マスター」

SE

バスルームへ（場所転換）

アロマ33

「ん、れろ、ん、んちゅ、んん、んは…。  
だめ、離れないで。

もつとだよ…マスター。

あむ、んちゅ、んん…（キス/10秒）」

ロレッタ38

「んちゅ～もうっ！  
結局アロマががつついているつて、どういう事ですの!?  
したいつてお願ひしたのは私ですのに！  
早く変わつて下さいまし！」

アロマ34

「んちゅ、ん、はあ。  
ふふ、ごめんねロレッタ。  
でも、もうちょっとだけ待つて。  
もうちよつとだけだから…あむ、んん…（キス/10秒）」

ロレッタ39

「もう…夢中になつてえ！  
ふん、いいですわ。  
先に私がご奉仕しちやうんですから。  
ねえマスター、今から貴女の身体を洗つて差し上げますわね。  
んつ：しょつと」

SE

ソープの音

ロレッタ40

「それじゃ、身体に触れますわよ、マスター。  
ん、んんん、んっ…。

はあ：マスターの身体って、とっても美しいですわよね。  
背中も、お腹も…とってもすべすべ。  
こうして触れているだけでも気持ちがいいですわあ。  
ん…うふ、うふふ、うふふ」

アロマ35

「ん、んちゅ、んは…。  
ふふ、貴方の身体はとても魅力的だもんね。

それじゃマスター、僕も貴女の身体を洗つてあげる。  
ちょっと待つてね…」

S E

ソープ音

アロマ36

「よし、できた。  
じゃあ僕は…貴女の下半身を洗おうかな。  
よいしょっと」

S E

アロマが身体に触れる音

S E

身体を洗う音

ロレッタ41

「うふふ、どうしたんですの、マスター。  
ふるふると震えて…。  
もしかして、アロマが下にいる事を意識しちゃつてますの？  
んもう、アロマばっかり…。  
ね？ 貴女の綺麗なお胸も洗つて差し上げますから…。  
私の事も意識して下さいましね。  
んふふふ」

アロマ37

「ん…ん…ん？」

うわあ…マスターの胸が、ロレッタの手でふよふよ動いてる。

こうして下から貴女の身体を眺めるのって、

結構やらしい光景だね、ふふ！

…ねえ、マスター。

僕ももつと貴女の身体を綺麗にしてあげる。  
だから、もう少しだけ足を開いて欲しいな？」

ヒロイン

わかつた…。

アロマ38

「ありがとうございますマスター。

それじやあ洗つてあげるね…つて。

…ふふ、マスターって身体も素直だよね。

こーこ、もうぬるぬるしちゃつてるよ」

ヒロイン

あんまり言わないで…

ロレッタ42

「あら、どうして恥ずかしがるのです？

今日はご褒美なんですよ。

身体も、そして心も、感じるままに気持ちよくなつて下さいまし。

ほら、こうしてお胸を触りながら、お耳を舐め舐めしてあげますわね。

たくさん啜らせてね、マスター！

んつ…（クンニ演技／10秒）」

アロマ39

「わ、凄い凄い！ どんどん濡れて來たよ！

ふふ…すつごくやらしくて、そして…とても美味ししそうな香り…！

んん…ああもうダメ！ 僕だつて我慢の限界！

たくさん啜らせてね、マスター！

んつ…（クンニ演技／10秒）」

ヒロイン

あ、あ、あつ、ああ！

ロレッタ43

「ちゅ、ぱ…。

あはっ！ マスターつたら、なんて可愛い声なの！

そんな声を聞いちゃつたら、私だつて我慢できませんわ。

ねえ、私とキスしましょ！

ほらっ！ あむつ、んちゅ、（キス／10秒）」

アロマ40

「ん、れろ、（クンニ／10秒）

んはあ！ ああ…だめ、全然ダメ。

これだけじゃ全然満足できない。

もつともっとマスターを味わわなきや…！

…ねえロレッタ、まずは君が摂取して。

僕は、その後にするから」

ロレッタ44

「んちゅ、んつ、ンはあ！ …ふふ、なるほど。

今日はアロマも理性が効かないって事ですかね。

わかりましたわ、先に私が頂戴します。

アロマはこのままマスターへの愛撫を続けて下さいませ。

よいしょっと…」

アロマ41

「ね、マスター。

もう一度僕とキスをして、お願ひ」

ヒロイン

ちょ、ちょっとまってほしい…。

アロマ42

「ううん、待てない。

ごめんねマスター。

僕、貴女とキスをしていないと、我慢が効きそうにないんだ。

だから、もうするっ…ん、んん…（Dキス／10秒）」

ロレッタ45

「ああ…本当だわ。

なんて美味しそうな香りなんですか…？

こんな御馳走を前に、待てなんて絶対に無理。

早速頂きますわね、マスター！

んん、ん、れろ、（クンニ表現／10秒）」

アロマ43

「んちゅ、んん、マスター、もつと…。

あむ、んちゅ、（Dキス／10秒）」

ロレッタ46

「んじゅる、れろ、れろ、んちゅ、んん…。  
んふふ、いきそなんなんですの、マスター。  
ん、じゅる、なら、イつて頂戴な。  
れろ、れろ、私に、極上の味を下さいまし。  
ほら、（クンニ演技／10秒）」

SE

ヒロイン絶頂

ロレッタ47

「ん、んちゅ、じゅるる、じゅるる、んん、んはあつ！  
はあ、はあ…ああ、イつたマスターの味！  
最っ高ですわ！」

もつと、もつと飲みたい…んっ！」

んじゅる、れろ、れろれろ…（クンニ演技10秒）」

アロマ44

「ん、ちゅ、はあ！  
もう、ロレッタ！」

夢中になるのもいいけど、そろそろ代わってよ。  
もう充分堪能しただろ？」

ロレッタ48

「んじゅる、ん、んはあ！  
んむう…わかりましたわよ…。

よいしょっと…ありがとうございました、マスター。  
とつてもいいエネルギーを得られましたわよ、うふふ！」

アロマ45

「さて、と…。  
マスター、片足をあげてくれる?  
持つてあげるから」

SE

ヒロイン動作

アロマ46

「ふふ、素直なマスター、可愛い。  
…ん、ちゅ。

それじゃ、入れるよマスター。  
僕をたくさん感じてね。  
僕も、貴女をいっぱい味わうから、さ！  
あ、ん、んんっ！ んあ、あ、はあ！」

SE

アロマ挿入

アロマ47

「あは、あはは！ ああ…入ったあ。  
んん…マスターの中、もう気持ちいい！  
ふふ、やっぱり僕は、こっちの方が大好きだね。  
だって、貴女からの快感をより強く感じるんだもの。  
だから…やっぱり待てなんてできない！  
動くからね、マスター！

（以降、突きの演技声／10秒くらい）」

ロレッタ49

「ああ、マスター。  
なんって甘い声を出されるの？  
その声を聴くだけで、私もぞくぞくしちゃいますわ！  
うふふふ…ねえマスター。」  
アロマと一緒に果てられるよう、  
こうして後ろからお手伝いして差し上げますわね。  
ほら、こうして乳首をきゅつてしてあげながら…  
あーむ…（耳舐め／20秒）」

アロマ48

「はあ、はあっ、あ、あはは！ 今、きゅつて締まつた！  
んつ、んつ、ふふふ、僕達に触れられてびりびりきちゃつた？  
いいよ、もつともっと感じてよ！  
僕もさ、んつ、すつごく気持ちよくて、たまんないから！  
んつ、ほらっ、ほ、らっ！  
…あっ！ あ、あは、あはははっ！ すつごお！  
奥を突く度に、貴女の快感が直接僕に流れてくるよ！  
ああ気持ちいい！ ほんとたまんない！  
あは、あははっ！  
んつ、はあ、はあっ、はあっ（以降突き演技／10秒）」

ロレッタ50

「れろ、れろれろ、んちゅ、はあ…ふふ！  
マスターってば、すつごい。

今、自分がどんな姿になつているか、わかつて いまして?  
とつてもとつても、淫らでやらしいんですよ。  
うふふふ、でも、それでいいんですの。

恥じらいなんて捨てて、その高まりに身を任せて。  
アロマが与える快感だけを意識なさつて下さいまし。  
こうしてロレッタが支えながら見ていてあげますから、うふふ！」

アロマ49

「はあ、はあつ、あ、ははつ、あははつ！  
マスター、声に余裕がないね！  
んはあ、はあ、いきそ？ んつ、いきそうなのつ？  
んつ、んんつ、ふふ、いいよ、いつて！  
真っ白になつて、僕にいっぱい美味しいエネルギーを頂戴！  
ほら、激しく突いてあげるからさあ！  
ほら、ほら、ほ、らあ！

あは、ははは、あはははつ！

（以降激しく突いている演技／10秒）」

SE

ヒロイン  
絶頂

アロマ50

「あつ、ああつ：あはあつ！  
あ、はあ、はあ：ははは…すつごお！  
めつちやくちや気持ちいい…！  
んつ、んん、んはあ、はあ、はあ、はあ、はあ…」

ヒロイン

満足できた…？

アロマ51

「はあ…はあ…。  
ん？ ふふ、うん、すつごく満足したよ。  
美味しい食事をありがとうね、マスター。  
ん、はあ…それじや、抜くよ。  
ん、んん、んはあ…」

SE

倒れるヒロイン

ロレッタ51

「あつとお…ふふ、力が抜けてしまいましたの？  
ふふふ、まどろんだお顔が可愛いですわね。  
…お疲れ様でした、マスター。

もうちょっとだけゆっくりしたら、一緒に寝室へ戻りましょうね」

アロマ52

「そんな心配そうに見つめないで、マスター。  
さすがに今日はこれでおしまいだよ。  
ほら、力が入らないなら、そのままロレッタにもたれていて。  
今、シャワーをかけてあげるからさ」

SE

シャワーの音 フエードアウト

SE

ベッドに潜る音

ロレッタ52

「んはー、お腹いっぱい！  
この満たされた感覚、本当に最高ですわよねえ！  
うふふ！ うふふふ！」

ヒロイン

私、ちゃんと満足させてあげられてる？

アロマ53

「ふふ、もちろんだよ、マスター。  
僕もすっごく満足してる。  
してるとても言つたけれど、  
マスターのエネルギーってね、すっごく美味しいんだ。  
多分、今迄の所有者様の中でも、一番おいしいんじゃないかなあ。  
…ロレッタはどう？」

ロレッタ53

「んー。

言われてみれば、確かにそうですね。  
なぜだかわからないけれど、マスターの味つて凄く癖になるんです。  
いつまでも啜つていたくなるというか…。  
どうしてなのかしら」

ヒロイン

…気持ちが漏れてるのかも。  
二人がいると、孤独じやないって思えるから

ロレッタ54

「？ どういう意味ですか？」

マスター、学院にお友達がいない訳ではないでしょう？

それなのに、どうして孤独だなんて…」

ヒロイン  
：私には、家族がいないの。

捨て子なんだ。

ロレッタ55

「えっ、す、捨て子!? マスターが!?

ど、どうして…」

ヒロイン  
私は、魔力が低かったから。だから、捨てられたの。

ロレッタ56

「そんな…。  
魔力が低いからって、親が子を捨てるなんて。  
なんて酷いお話なの…」

アロマ54

「でも、決してありえ無い話じゃないよ。  
魔術師の世界って超実力主義だもん。

マスターのように魔力の低さで悩む人は少くない。

魔力って、遺伝に関係なく、その人が個として生まれ持つ物だからね。  
：だからこそ、僕達みたいな道具が作られる訳だし」

ヒロイン  
アロマ？

アロマ55

「あ、ううん、なんでもないよ。  
やつぱりさ、貴女が僕達を拾ったのは運命だつたんだよ。  
捨てた親を見返してやれっていうね」

ヒロイン  
：ありがとうございます。ふあ…。

ロレッタ57

「ふふ…大きなあくび。  
眠くなつてきました？  
それじや、マスターはもうお休みくださいまし。  
ほら、布団をかけてあげますから。  
よいしょっと」

SE

掛け布団をかける

ア56/ロ58

「それじゃ、お休みなさい、マスター」

SE

ロレッタの手を掴む

ロレッタ59

「？ マスター？」

ヒロイン

寝付くまで、一緒に寝てほしいな。

ロレッタ60

「えっ…。

まあ、うふふ！

今夜のマスターは随分と甘えん坊ですわね？  
寝入るまで傍にいてほしいだなんて

ヒロイン

迷惑？

アロマ57

「ううん、迷惑なんて思うはずがないじゃない。

貴女がそうして欲しいと望むのなら、もちろん一緒に寝るよ。  
それじゃ…」

ア58/ロ61

「よいしょっと」

アロマ59

「ふふ。

なんだか不思議な気分だね。

マスターのベッドで眠るなんて。

こんなこと初めてだから、少し緊張する

ヒロイン

「うーん、初めてだよ。

だって僕達は道具だもん、当然じゃない」

ヒロイン

「じゃあ、これからは3人一緒に寝よう

アロマ60

「うん、初めてだよ。

だって僕達は道具だもん、当然じゃない」

ロレッタ62

「えつ、え？」

それ、本氣で言っていますの？

あ、いえ：マスターの命令に従うのが、私達の務め。

これからも一緒にと仰るのなら、もちろんそうしますけれど…。

その：本当にいいんですの？」

ヒロイン

うん

ロレッタ63

「そう…。

じゃあ、お言葉に甘えまして、今日からご一緒にしますわね、マスター！  
ふふ！」

ヒロイン

ありがとね、二人とも

アロマ61

「も、もう。

マスターはすぐにお礼を言うんだから。

人のように扱ってくれて、今喜んでいるのは僕達の方なんだからね。

…ほらっ、明日も学院あるんだし、貴女はもう眠ろう？  
ゆっくりと目を瞑つて…マスター！」

ロレッタ64

「ふふ、瞑りまして？

それじや、静かに深呼吸をして…」

ア62／ロ65

「お休みなさい、大事なマスター！」

## トラック4 マスターの心

SE

帰つてくるヒロイン

ア63／ロ66

「お帰りなさい、マスター！」

ヒロイン

ただいま

ロレツタ67

「もう、何をのんきにただいまなんて言つてはりますの！採用試験の結果を聞きに学院に向かつてから、こんな遅い時間まで戻らないなんて！」

私達がどれだけ心配したと思つて!?」

アロマ64

「そうだよマスター。  
一人で行くつて言うからずっと待つっていたのに…。  
いつまで経つても帰つてこないから、  
試験に落ちて傷ついているのかなつて  
ロレツタと色々相談していたんだからね」

ヒロイン

「ご、ごめんね、ふたりとも…。

ロレツタ68

「…まあ、ちゃんと反省しているならいいんですけど。  
それで、肝心の試験はどうだったんですけどの…？  
もちろん、合格したんですね？」

間

アロマ65

「マ、マスター…？」

ヒロイン

「…合格しました！」

アロマ66

「！ 合格？ ああ…！」

ア67／ロ69

「おめでとうございます、マスター！」

ロレッタ70

「頑張りましたわね、マスター！」

ロレッタ、本当に嬉しいですわ！」

アロマ68

「僕も嬉しいよ！」

これで学院を卒業したら、晴れて魔術師と名乗る事ができるんだね。  
本当におめでとう、マスター！」

ヒロイン

二人に見せたい物があるんだ

ロレッタ71

「？ 見せたいもの？

あ、もしかして、その手に持っている袋の事かしら！  
一体何が：あ、マスター？」

SE

鏡台に向かうヒロイン 椅子をポンポンするSE

ロレッタ72

「：な、何ですの、あの妙な笑顔。

絶対何か企んでいますわ」

アロマ69

「う、うーん。

とりあえず行つてみようよ、ロレッタ。

ほら、マスターぽんぽんしながら待つてるし、ね？」

SE

アロマ達の足音

ロレッタ73

「よいしょっと。

ほら、座りましたわよ。

それで、私達はどうしたらいいんですの？

：目を瞑る：んですのね。

：ん、ほら、瞑りましたわよ」

SE

ヒロイン、耳飾りをつける

アロマ70

「わっ、ちょ、な、なに？

急に耳にふれられたら、びっくりするよ！

：えつ、もう目を開けていいの？  
わ、わかった：ん」

ヒロイン

鏡を見てごらん？

アロマ71

「鏡？ えっと…。  
…あれ？ 耳に何かついてる…。  
これって…」

ロレッタ74

「まあ、これってイヤリングですね！  
アロマのはサファイアのついたカフス、  
私はエメラルドが飾られているのかしら！  
キラキラしていてとっても美しいですわあ…！  
ね、そう思いません？ アロマ！」

アロマ72

「うん。  
確かに素敵なアクセサリーだね。  
それに、凄く高価そうだし…」

ヒロイン

喜んでくれた？

アロマ73

「うん、もちろん。  
凄く嬉しいよ。」

…それで、マスターのは？

貴女はどんなアクセサリーを買ってきましたの？  
えつ、無いって、どうして？」

ヒロイン

二人へプレゼントする為に買ったから

ロレッタ75

「ふ、プレゼントって…ど、どうして突然…！」

ヒロイン

今までのお礼だよ

ロレッタ76

「！ 今までのお礼って…何を言っていますのよ！  
私達、お礼を言われる事ではないって、  
いつも伝えていたではありませんか！  
…私達は魔術師に助力する為に作られた人形、  
利用されてこそその存在なんですよ。  
こんな…こんな施しを受けるような立場ではあります…」

ヒロイン

道具じゃない

ロレッタ77

「えっ、道具じゃないって、どういう意味ですの…?」

ヒロイン

私はもう、家族だって思ってるよ

アロマ74

「!?: マスター、本気で言ってるの?  
僕達を、家族と思っているなんて…」

ヒロイン

迷惑…?

ロレッタ78

「え…あ、あ…い、いいえ!  
迷惑だなんて思っていませんわ!  
むしろ、身に余る光栄だと感動しているくらいで…。  
……」

ヒロイン

ロレッタ?

アロマ75

「…ふふ。  
ロレッタ、感動して声も出ないみたいだね。  
すぐに戻ってくると思うから、しばらく浸らせてあげてよ、マスター」

ヒロイン

ふふ、そつか。

アロマ76

「うん、お願い。  
…ね、マスター。」

頂いたこのプレゼント、絶対大事にするね」

ヒロイン

ありがとう。

…これから、食事にする?

アロマ77

「え、食事?  
…ううん、今日は大丈夫だよ。  
ほら、力を使った訳じゃないからさ」

ヒロイン

そう?

アロマ78

「うん、本当に大丈夫。

気遣つてくれてありがと、マスター」

ヒロイン

それじゃ、シャワー浴びてくるね

アロマ79

「シャワー？ そつか。

それじゃ、ゆっくりと汗を落としてきて。

：本当に良かつたね、マスター」

S E

風呂場に行くヒロイン

S E

ヒロイン去る

ロレッタ79

「…こんな高価な物を用意してしまって、  
マスターは心から私達を想つてくれていますのね」

アロマ80

「うん…こんな事をしてくれたのは、あの人気が初めてだ。  
とてもありがたいし、凄く嬉しい。  
でも…だからこそ、胸が痛い。  
だって、こんな施しを受ける価値なんて、  
僕達には無いんだから…」

ロレッタ80

「つ、マスター…。  
うつ、くつ…ごめんなさい…マスター！  
ご、めんなさ…う、ううつ、うあああ、うああああ！」

## トラック5 懺悔

(学院内にいるヒロイン、歩いていて突然倒れる)

S E 眠っているヒロイン

ロレツタ81 「マスター、なかなか起きませんわね」

アロマ81 「うん…」

ロレツタ82 「ねえ、これってやつぱり…私達の影響ですわよね」

アロマ82 「…そうだね。」

マスターが僕達を拾つて、もう数か月が経つ。  
彼女の魔力の低さを考えたら、

身体（からだ）に症状が現れてもいい頃合いだ」

ロレツタ83 「…辛いですわね」

アロマ83 「うん…。」

ふふ…辛いか。  
おかしいなあ…所有者がこうなつていく様なんて、  
今迄散々見て來たつていうのにね」

ロレツタ84 「それくらい、彼女が今までの所有者達と違うという事ですわ。」

…ねえアロマ、やっぱり魔女様にお願いしてみませんか？  
もう、役目を果たせないって」

アロマ84 「またその話？ お願いしたつてどうせ無駄だよ。

だつて、役目を果たせなくなつたドールをどうしたのか、  
君だつて目の前で見てるだろ？」

ロレッタ85

「それはつ…そうです、けど。  
でも…つ」

SE

起きるヒロイン

ア86/ロ86

「！ マスター！」

ヒロイン

ここは…。

ロレッタ87

「ここは学院の医務室ですわ。  
マスター、学院の廊下で突然倒れたんですよ。  
…意識が戻られて、本当に良かつた」

ヒロイン

！ え、じゃあ学院?! 二人ともつ…

アロマ87

「あ、落ち着いて、マスター。  
治癒師の先生なら、ちょっと前に呼ばれていないよ。  
いくら夜になつたからって、  
さすがに誰かがいる前で大きくなろうとは思わない。  
だから、安心して」

ヒロイン

…私、どうして倒れたのかな

ロレッタ88

「倒れた、理由は…。  
貧血だって、治癒師の先生は仰つていましたわよ。  
ここ最近、模擬試合とか採用試験とかで、色々頑張つていましたし、  
きつと疲れが出ちやつたんですね」

SE

起き上がるヒロイン

ロレッタ89

「あ、帰りますの？ わかりましたわ。  
それでは、一度小さい姿に戻り…え？  
なんでの、マスター…」

場面転換

ロレツタ90

「なんだか不思議な感覚ですわね。  
こうしてマスターと歩いて帰るなんて…。  
それこそ、人間みたい」

アロマ88

「だね、いつもはポケットか鞄の中だし。  
‥マスターはいつもこんな風景の中を帰っていたんだなあ。  
ふふ、星空がとっても綺麗だ」

ヒロイン

歩いて帰るのもはじめて？

ロレツタ91

「ええ、歩いて帰るのは初めてですわ。  
そもそも、私達を人のように扱つて下さる事自体、  
マスターが初めてですもの」

ヒロイン

じゃあ、次からはこうして歩いて帰ろ？

アロマ89

「マスター‥うん、もちろん。  
前も言つたけど、貴女が望んでくれるなら、何だつて共にするよ」

ヒロイン

うふふ、嬉しい

ロレツタ92

「ふふ。‥ねえ、身体は大丈夫？  
もし辛かつたら言つて下さいましね。  
この姿なら、貴女を背負つて帰る事だつてできますから」

ヒロイン

ありがとう、嬉しいね

ロレツタ93

「優しいだなんて、そんな‥。  
私達はただ、マスターが心配なだけですわ」

ヒロイン

嬉しいな…これからも一緒に居てくれる？

アロマ90

「！‥うん。  
貴女が僕達を捨てない限り‥ずっと貴女の傍に一緒にいられるよ」

ヒロイン

捨てるなんてしないわ。  
だって、家族だもん。

ロレッタ94

「家族、か。  
ふふ、やっぱり嬉しい響きですわね。  
すとんと私の胸に入ってきて、ぽつと心が暖かくなるんですの。  
……。  
ねえマスター、私達の事…好き？」

ヒロイン

もちろん

ロレッタ95

「まあ、即答なんですか？ うふふ！  
…私もですわよ、マスター。  
私達を人と同じように接して下さる貴女がね、大好きなんですよ。  
アロマも、そうでしょう」

アロマ91

「…もちろん。  
貴方は、僕達を僕達として見てくれる。  
そんな人、好きにならないはずがないもん。  
…うん、ならないはずがない。  
あはは、口に出したら、ますます自覚しちゃうな。  
僕は貴女が大切で…もう、苦しめたくはないんだ」

ロレッタ96

「！ アロマ…やっと貴方も吹っ切れましたのね」

アロマ92

「うん。  
僕ももう、覚悟を決めたよ  
ふふ、優柔不断でごめんね、ロレッタ」

ロレッタ97

「いいんですよ。  
それに、アロマが同じ選択肢に至るつて、私わかつていましたもの。  
だって、私達は一心同体なんですから、うふふ」

ヒロイン

二人とも…？

アロマ93

「あ、あはは…ごめんなさいマスター。  
訳わからない話をしてるよね。

…すう、はあ…。

ねえマスター、貴女に伝えたい事があるんだ。  
寮に戻つたら、僕達の話を聞いてくれる?」

ヒロイン  
えつ…う、うん

アロマ94  
「ありがとう。

…それじや、早く帰ろう。

一秒でも早く、貴女に僕達の事を伝えたいから」

SE  
歩く音

場面転換

SE  
家に帰つてくる

アロマ95  
「…いざ、この話をするつてなると、緊張しちやうな。  
ふふ、こんな感覚も初めてだね、ロレッタ」

ロレッタ98  
「ええ。

でも…けじめはしつかりとつけなくては。

…マスター、改めて自己紹介をさせて下さいましね。

私達は、名称ドール。

魔女様によつて作られた、エネルギー吸收体ですわ」

アロマ96

「僕達ドールの役目は、取り入つた人間の生命エネルギーを奪い、  
その力を創造主である魔女様に捧げる事。  
僕達はその役目を果たす為に、ずっと貴女の傍にいたんだ」

ヒロイン

…驚い、たな。

ロレッタ99

「…驚きますわよね。

でもね、これが真実。

貴女が今日のようになに倒れてしまったり、  
時々ふらついたりしていたのは、全て私達が原因なのです。  
私達にエネルギーを吸収された人は、ゆっくりと衰弱していくから…」

ヒロイン

どうやつて吸い取っていたの？

アロマ97

「吸収方法は、僕達にとつての食事だよ。  
つまり、セックス。

自分達が生きる為のエネルギーも、  
役目として吸収すべきエネルギーも  
どちらも性的快感から得られるんだ」

ヒロイン

エネルギーを奪われ続けた人はどうなるの？

ロレッタ100

「エネルギーを奪われ続けた人間は最後、死に至りますわ。  
もし所有者が私達を疑い始めたとしても、  
その頃には抗う体力もなく、死人に口なし状態。  
そうしてターゲットの死を見届けた私達は、  
次の獲物を見つけ、再び食らっていくのです。  
今の貴女のように」

アロマ98

「マスターみたいに基礎魔力が低くて優しい人はね、  
僕達にとつて格好の獲物なんだ。  
貴女も悩んでいたからよくわかっているだろうけど、  
魔術師を名乗る為に、何よりも重要視するのは基礎魔力。  
だから、傍に置いておくよう言葉巧みに誘導してきたんだよ」

ヒロイン

もしかして、最後は殺すつもりだったの？

ロレッタ101

「…ええ、最終的には殺すつもりでいましたわ。  
だって、それが私達の生き方であり、役目でしたもの」

ヒロイン

じゃあどうして…こんな話を？

ロレッタ102

「正体を話した理由？」

：ふふ、そんなの決まっているでしよう？

貴女を殺したくないと思つたからですわ」

ヒロイン

！

ロレッタ103

「今までの所有者は皆、氣味が悪いからと、必要以上に接触しなかつた人の方が普通だつた。

もちろん、私達もそれが当たり前だと思っていましたから、扱いについて深く考えた事すらありませんでしたの。

私達はエネルギーさえ攝取出来たら、

あとはどうでも良かったですから。

でも：貴女ときたら、いちいちお礼を言つたり、こんな高価なプレゼントを贈つたり。

あげく、家族だなんて言つて。

そんなの：好きになつても、仕方が無いでしよう？  
だからね、アロマにずっと相談していたんですよ。

もう、貴女からエネルギーを奪いたくないって。

：なかなか頷いてはくれなかつたけど

アロマ99

「ごめんなさい。

僕は、臆病で優柔不斷だつたから、色々考へてしまつたんだ。

：創造主である魔女様は、とても怖い人だから。

でも、僕達を僕達として見てくれる貴女は、

やつぱり大切で、大好きで…。

さつき、やつと踏ん切りがついたんだ」

ヒロイン

大丈夫なの？

アロマ100

「大丈夫かと聞かれたら、わかんないかな。  
さつきも言つたけど、魔女様はとても怖い人なんだ。

ドールは他にも存在しているけれど、

使えないと判断された人形は、簡単に破棄されていたから」

ヒロイン

そんな…。

アロマ101

「僕達は、貴女を殺したくない。  
でも、役目も果たさないといけない。  
だから、選べる選択肢といえば、  
違う人間の命を奪うつて行為になるんだけど…」

ヒロイン

それはだめ！

アロマ102

「ふふ…やつぱり。  
貴女はダメだつて言うと思つた。  
じゃあ…最後の選択肢しかないかな」

ロレッタ104

「最後つて…。  
ああ、なるほど…機能停止ですわね？」

ヒロイン

!? 本気なの？

ロレッタ105

「ええ、本気ですわよ。  
きつとこの方法が、誰にも迷惑をかけずに済むんです。  
ふふ、陰で魔術師達を殺してきた人形としては、  
相応の末路ですわね」

アロマ103

「うん。  
…マスター、ずっと貴女を騙し続けてきて、ごめんなさい。  
お詫びとして、僕達の魔力を貴女に全部お渡しします。  
僕達の魔力は、魔女様のものと同様。  
少なくとも、貴女が一生を終えるまでの年月くらいなら、  
高い魔力を保持できると思うから」

ロレッタ106

「どうか、立派な魔術師になつて下さいまし。  
私達、ずっとずっと応援していますわ。  
…それではアロマ、始めましょうか」

アロマ104

「うん。すう、はあ…。  
術式、展開！」

SE

魔法エフェクト音（どんどんヒートアップするSE）

ヒロイン

…ダメ！

アロマ105

「え、ダメってマスター——うわあっ！」

SE

ヒロイン アロマを押し倒す

ロレッタ107

「ア、アロマ!?」

アロマ106

「いたたた…ちょ、マスター、一体何…んんっ?!  
んっ、んちゅ、んは、ま、まつて、ますたつ、  
あむ！ んん、んちゅ、ん、んちゅ、ちゅ、ま、てえ…れる、  
ん、じゅるる、じゅるる、んんっん！（以下／キス10秒）」

ロレッタ108

「マ、マスター！ まつて、本当にやめて！」

キスも貴女のエネルギーを奪ってしまうのです！  
だから離れて下さいまし、マスター！ マスターつてば！」

アロマ107

「ん、んちゅ、んつ、ちゅ、あはあつ！  
はあ、はあ…。

あ、ああ…貴女の生気が僕の中に…！  
どうして？ どうしてなの？

もう、貴女の命を奪いたくないって言つたのに…あつ！  
んんっ、ちょ、と…マスター！

ま、まつて、そんな、僕のに、触らないで！  
…あ、はあ、ん、はあつ！

ます、たあ…！ 一体、どういうつもり、なの？  
ん、んはつ、はあ、これ以上されたら、  
僕だつて我慢ができなくなる。

また貴女の生気を奪ってしまう事になるんだよ！?  
それでもいいって言うの！」

ヒロイン

いいよ。だつて、これは私の罰だから。

アロマ108

「あ、はあ…はあ…はあ。  
…自分への罰つて…どういうこと?」

ヒロイン

元々するい事をしていたもの。

アロマ109

「！ そんな、そんなことない！  
貴女が僕達を拒まなかつたのは、  
そう選ぶように僕達が誘導したからなんだよ！  
貴女はズるくない！ 何も悪くないんだ！」

ヒロイン  
うん、だからね、これは3人の罰なんだよ

ロレッタ109

「えつ…3人の罰、とは？」

ヒロイン  
わたしを騙した二人の罰、受け入れた私の罰。

ロレッタ110

「……。

言いたい事はわかりましたわ。

理由はどうであれ、

罪を犯した者は何事にも等しく罰せられなくてはならない…。

そういう事でしよう？

けれど…マスターはそれでいいんですの？

せつから魔術師への道が開かれたというのに、  
長生きする事ができないんですよ？」

ヒロイン  
大好きなみんなで死んじやうなら、それがいいよ

アロマ110

「あ…はは。

大好きな人達と一緒に、か。

それを言われてしまつたら、僕達は何も言えなくなつちやうよ。

でも…貴女はもう、覚悟を決めたんだね。

…わかつたよ、マスター。

貴女がいいと許してくれるのなら、ずっと傍にいる。

だって、僕達の今の所有者様は…貴女なんだから」

ヒロイン

ふふ、良かつた。

ロレッタ111

「もう、そんな幸せそうに笑わないで下さいまし。  
どう気持ちを返せばいいのか、わからないんですからね。  
うふふ」

ヒロイン それじゃ…ご飯にしようか

アロマ111 「！…ふ、ふふ、貴女つて人は本当に…。

でも、ありがとうマスター。

それじゃ、お言葉に甘えて…貴女の事をいただくな」

## トラック6 一蓮托生

SE 服を脱ぎ、ベッドに座るヒロイン

アロ112 「……」

ヒロイン どうしたの？

ロレツタ113 「あ、ご、ごめんなさいまし。

その、今迄は役目と生きる為だけにしていたでしよう？  
だから、ただする為だけにって思うと、その…緊張してしまって…」

ヒロイン 気にしなくていいのに

アロマ113 「気にするなって言われても気にしちゃうよ。

だって、嫌だと思っていても、

絶対に生氣を奪つてしまふんだもん…」

ヒロイン 仕方がないなあ、私からしてあげるよ

アロマ114 「えつ…マスターからつて…あ、わつ！」

ロレツタ114 「マスター!?」

SE アロマをベッドに倒す

アロマ115 「び、びっくりした…。

もうマスター、いきなり押し倒したらびっくりする…  
んつ!? んんつ、んちゅ、んつ、(受けキス/5秒)

んちゅ、んはあ！ はあ、はあ…マスター…。

んつ、あむ、んちゅ、あ、んつ…んちゅ… (10秒くらいキス)」

ロレツタ115 「ああ…アロマ、なんて気持ちがよさそうなの…。

私も、私もそんな風にマスターを感じたいですわ。  
ねえマスター…。

せめて私にも触れさせて下さいまし」

ヒロイン いいよ

ロレッタ116

「！ いいんですね？  
ありがとうございます、マスター。  
んつ：しょつと。

ではマスター、貴女の味がもつと甘くなるよう、  
お身体を高めて差し上げますわね。  
ほら：こうして後ろから、お胸に触れますわよ。  
んつ：ん：うふふ、何度触れても柔らかいお胸…。  
私の大好きなお胸ですわ…うふふ。  
ん、んん、ん…」

アロマ116

「あ、んつ：んちゅ…（キス／5秒）  
んつ、んん、んちゅ、ん、ちゅはあ…ふふ。  
ちょっとだけ甘みが強くなつたよ、マスター。  
ロレッタが触れたからかな？」

ヒロイン

うん…もつと感じて、アロマ

アロマ117

「うん…僕も、もつともつと貴女を感じたい…。  
だから、たくさんキスさせてね…。  
はむ、んん、れろ、じゅる、じゅるる、んんつ、ん（Dキス／10秒）」  
「ふふ、どんどん身体が暖かくなっていますわよ、マスター。  
それに…下の方から甘い香りが、ふわふわと漂ってきて…。  
ああ…やつぱりダメ、我慢できませんわ！  
んつ…。  
まあ…んふふ、やつぱり濡れていらつしやる。  
なんて美味しそうなんでしょうか。  
ごめんなさいマスター。

私：頂いちやいますわね、んつ、れろ…（クンニ演技／10秒）」

アロマ118

「んちゅ、ん、んん、んはつ！  
…ふふ、口離れちゃつたね。  
ロレッタの舌、感じちゃつた？」

ヒロイン う、んっ…

アロマ119

「ふ…やっぱり。  
そうやつて感じてる貴女の顔、とつても可愛い。  
ねえマスター、そのままロレッタに  
甘い蜜を沢山味わせてあげて。

今度は僕が、貴女の身体を愛撫してあげるから…ほら。  
こうして、胸を触りながら…んつ、（乳首舐め／10秒）」

ロレッタ118

「ああ、より甘みを感じてきましたわ。  
こんなの、こんなの舌が止まりません…。  
ん、れろ、じゅる、じゅるる、んん、  
んじゅる、じゅるる（クンニ演技／10秒）  
もつと…奥まで…んつ、れろ、じゅる…（クンニ演技／10秒）」

アロマ120

「ん、んちゅ、んは…。  
はは、マスターってば、もう限界近いんじやない？  
…ロレッタに沢山舐めてもらつて、一度真っ白になろ？  
下の敏感な所、僕も触つてあげるからさ」

ロレッタ119

「ん、じゅる、じゅるる、んんんつ、んはあ！  
マスター、マスター！  
んつ、（クンニ演技／10秒）」

ヒロイン

絶頂

ロレッタ120

「じゅるる、じゅるる、んつ、んんつ！　んちゅ、んはあ！  
はあ、はあ…あはあ…！　なんて素敵なお味なの！  
今迄よりも、すっごく甘みを感じましたわ。  
うふふ…これってやっぱり、心の底から  
マスターを感じるようになつたからかしら」

ヒロイン

よかつた…？

ロレッタ121

「ええ、ええ…！」

とつても美味しかったですわ、マスター。  
沢山舐めさせて頂いて、ありがとうございました。  
ん、んちゅ、んつ…んふふ、キスもとつても甘い…。  
ん、んちゅ…マスター…好き…ん、んちゅ、んんつ…（キス／5～6秒）  
ん、ちゅ、はあ…はあ…」

アロマ121

「…ロレッタ、凄く恍惚としてる。

貴女の味は、前からとても美味しかったけど、  
そんなに感覚が違うんだ…。  
ねえマスター、僕も貴女を味わいたいよ。  
いい？」

ヒロイン

もちろん

アロマ122

「！ マスター…」。

ふふ、ありがとう。

それじゃ、僕の顔に腰を落としてくれる？」

SE

腰を下ろすヒロイン

アロマ123

「ああ、なんていい眺めなんだろう。

貴女の美味しいそなとろとろが、こんな目の前に…。

それじゃ、舐めるねマスター…。  
ん、れろ、れろ、（クンニ演技/10秒）」

ロレッタ122

「うふふ、マスターつてば、すつごくやらしい腰つき。  
アロマの舌、気持ちがいいんですね。

なら、舐めて欲しい所にぎゅっと押し付けて、  
もつともつとアロマに甘えて下さいまし。

私も、貴女のお胸を揉んで差し上げますから！  
んふふ、んふふふ！」

アロマ124

「んっ、れろ…んはあ。

ああ、美味しい…！」

貴女の愛液、今迄以上に別格な味だよ、マスター！  
んっ、れろ、じゅる、じゅるる、（クンニ演技／5秒）  
ん、れろ、じゅる、じゅるる、じゅるる…んっ、あっ」

SE

ヒロイン 離れる

アロマ125

「あ、あれ…？ マスター…どうして、離れちゃうの。  
僕、もっと貴女の蜜を感じていたいよ」

アロマ126

アロマは入れる方がすきでしょ？ 入れてあげる

アロマ127

「！ 僕に入ってくれるの？ …そつか。

へへ…嬉しいな。

…それじゃあ、お願ひします、マスター」

SE

ヒロイン アロマに挿入

アロマ127

「あ、んっ、ああ、あ、あ、あはあっ！  
あ、あはは…なに、これ。

前にマスターに入れた時と、全然感覚が違う。  
う、んん…貴女からの快感が、凄いや。  
ん、んん…うふふ、この、甘く感じるのってさ、  
ロレッタも言つていたけど、

きっと、僕達の気持ちが通じているからなんだね。  
じやないと、ん、はあ…こんなに、幸せだなって、絶対想わないもん。  
あ、はあ、はあ…」

ヒロイン 動くよ、アロマ

アロマ128

「…うん、いいよ。  
貴女のタイミングで、動いて。

あ、あっ、んっ、んん、んはあ、はあ、  
(以下ヒロインからの騎乗位喘ぎ/15秒)」

ロレツタ123

「……。

マスター、夢中で腰を振っていますわね。

アロマと一緒に気持ちよくなっているのが、良くわかりますわ。

…どうしてかしら。

今迄アロマが貴女の中に入れていても、何も思わなかつたのに。

どうしてか今は、自分が女性型である事が凄く寂しい…。

ねえ、ねえマスター。

私がこうして愛撫している事、ちゃんと意識して下さっています?  
どうかロレツタの事も感じて下さいまし…！」

ヒロイン  
じゃ、キスしよ?

ロレツタ124

「！ ：はい、はい！

いっぱいいっぱい、キスしますわ。

こっち向いて下さいまし：マスター。

ん、んちゅ、ん…ますたあ…あむ、んちゅ…

（キス／10秒）

アロマ129

「はあ、はあ、はあ、んつ、ああ！

今、きゅつてしまつた…！

んつ、んつ、マスター、感じてるんだね！

ん、はあ、はあ、はあ、貴女から…んつ、

エネルギーが、僕に、流れてる、から！

んはあ、はあ、はあ、やだな、もう。

んつ、本当は、これ以上、吸い取りたくなんて、ないのに！

んつ、あ、はあ！ はあ！ 美味しくて…んつ、

離れて欲しくないって、思っちゃうよお！

あ、はあ！ あは！ （以降突き噛み／10秒）

## ロレッタ125

「んちゅ、んん：んはあつ！」

：アロマの気持ち、よくわかりますわ。

こうして唇を交わすだけでも

私の中にエネルギーがいっぱい流れできますもの。  
もつともつとマスターと気持ちよくなりたいけれど、  
でも、これ以上はきっと、沢山貴女の命を削ってしま…

んつ!? ん、んちゅ、ん！ んんつ、ま、て！  
ます、たあ：あむ、んちゅ、んんつ、んじゅる、  
んん、んんんつ、んはあ！

あ、はあ、はあ…マ、マスター？ はあ、はあ…」

## ヒロイン

私がいって言つてるの。

二人ただ：ほしいままに、感じていて！

## アロマ130

「！ 僕達の：欲しいままに：つて！

あ、あつ、ああ！

マスター、激しいって！ んつ、んああ！

だめ、だよ！ そんな、そんな激しく動かれたら、  
僕、どんどん気持ちよくなつちやう！

あ、ああ、んつ、んつ、なに、これ。

んつ、あ、はあ、はあ、気持ち、いい！

んつ、マスターの中が、気持ちよくて、快感が、美味しくて！

僕、僕、もう、どうにかなりそう！

んああ！ はあ！ はあ！ はあ！

## ヒロイン

ロレッタ、おいで！

## ロレッタ126

「え、おいでつて…あ、きやあ！」

## S E

横になるヒロインとロレッタ

（騎乗位から後ろを向いてロレッタを押し倒しています）

ロレッタ127

「あ、マスターが、私を見下ろして…。

つ…あ、あら？ どうしたんでしょう、私。

何だか、急にドキドキしてきて…。

…またあ…私…あ、んん！

んむ、ん、ちゅ、んん…んちゅ…んはあ…！

マスター…好き…んちゅ、んつ（キス／10秒）」

アロマ131

「あ、あ！

…貴女の背中、こんなにも…綺麗、だつたんだね！  
んつ、んつ、あ、はあ、はあ…マスター、ごめん！

僕…僕ももう、欲望が止められない！

貴女を、激しく抱きたい！

んつ！ はあ！

はあ！ はあ！ はあ！ 好き、好きだよマスター。  
もつともっと僕で感じて、感じて！

壊れるくらいに僕で一杯になつて！ ほら、ほらつ！

あつ、はあ、はあ、あ、あはは！

こうやつて後ろから突いたら、もつと締まるようになつたよ！

ふふふ、気持ちがいいんでしょ、マスター！

あ、はあつ、はあつ、あはは！

凄い、凄い！

びりびりつて、僕の中に貴女のエネルギーが入つてくる！  
んああ、あああ！ 甘い、甘いよ、マスター！

んつ、んつ、んふふ、はは！ はあつ、はあつ、はあつ！」ロレッタ1

28 「ん、んちゅ、んんつ！ れろ、んんつ（以下Dキス／5秒）

ますたあ、好き…好きですわ、マスター！

あむ、んちゅ、んんつ、れろ、ん、じゅる、じゅる！

（以下Dキス／10秒）」

アロマ132

「あ、はあ、はあ、あ、あはは！ 気持ちいいよマスター！  
はあ、はあ、僕は、僕は貴女を殺したくない。

でも、やっぱりこの快感の味には抗えない！  
だから…だから、僕はこれからも貴女を抱く！

貴女から沢山美味しいのを貰うんだ！

んつ、んつ、んふふ、いいよねマスター。

あ、はあ、はあ、はあ、あつ、あはは！

僕とロレッタのキスで、もう夢中なんだね。

：いいよ、このまま、貴女のいい所をたっくさん突いて

今日最高の高みに昇らせてあげる。

ほら、ほら、ほらつ、ほらあ！（以下激しい突き演技／10秒）

ロレッタ129

「ん、んちゅ、んはつ！

あ、はあ、はあ…うふふふ！

マスター、切羽詰まつたお顔をされて…！

もういきそうなんですね？

んつ：ほら、こうしてロレッタが手を繋いであげますから。

だから、安心していつて下さいまし、マスター！』

アロマ133

「あ、ああ、あああつ、あんつ、くつ、ん、んはあ！

ああ、くる、んつ、くる、くる！

あ、あは、あはは！ ほら、いつて、マスター！

訳わかんないってくらい、ぐちゅぐちゅになつて、

僕に最高の味を与えてえ！ あ、あああつ、ああああ、んああつ！』

SE

ヒロイン絶頂

アロマ134

「あつ、あああ、ああ、あつはあ！ んはあ！

あ、あ…あ、ははは！ はははは！ すんごお…！

あはは、あははは…！

はははつ…んはあ！ はあ、はあ…はあつ！』

倒れるヒロイン（ベッド軋み音）

SE

ロレッタ130

「！ マスター！』

アロマ135

「…あっ、あ！ だ、大丈夫！？ マスター！  
ごめんね、すぐに抜くから！  
んっ、ん、はあ…！」

SE

アロマが抜く音（水音）

アロマ136

「…マスター、本当にごめんね。  
僕、またあんなに動いちやつて…」

ヒロイン

お腹、いっぱいになつた？

アロマ137

「え？ そ、それは、もちろんだよ。  
お腹も一杯になつたし、凄く…美味しかつた」

ヒロイン

ロレッタも？

ロレッタ131

「ええ、私もですわ。

…命を張つて下さつてありがと、マスター」

アロマ138

「僕も、ありがとうございます。…あつ」

SE

二人を抱きしめるヒロイン

ア139／ロ132

「…マスター？」

ヒロイン

私達は最後まで一緒だよ…約束。

アロマ140

「！ うん、もちろん。  
…ねえマスター、改めて誓わせて。

僕達は、これからも貴女だけの補助道具となつて、ずっと力になるよ。  
だから、貴女も命が続く限り、自分が望む魔術師になつて下さい。  
…そして、貴女の死を見届けたその瞬間、僕達もただの人形に還るよ」

ロレッタ133

「それまでどうか、末永くよろしくお願ひしますわね」

ア141／ロ134

「最愛の、マスター様」